

読書メモ2018年7月号

島地勝彦著『神々にえこひいきされた男たち』
(講談社＋α文庫・2017年) ほか

やなぎさわかつひろ
柳沢克央 編

(信州・上田仮説サークル)

2018年7月28日(土), 7月例会用レポート

◇はじめに—

前回までの「読書メモ」と同様、サークルで発表することを目的とすると、読書がはかどるので、今回もこのメモを作成しました。自身のため、記録を残すことが第一目的です。みなさま、よろしく(適当に)おつきあい下さい。今までのものと同様に説明あり、引用あり、要約あり、感想ありで諸々が混交しておりますのでご注意を。(私物)と書き添えてあるもの以外はすべて篠ノ井高校および屋代高校図書室蔵書。

◇6月号で読んだ本

◎青木やよひ著『ベートーヴェンの生涯』(平凡社・2009年初版刊・2018年復刊)

◎ジェニ・ウィルソン他著・吉田新一郎訳『増補版「考える力」はこうしてつける』(新評論・2004年初版発行・2018年増補版発行)

◎幸田露伴著『五重塔』(岩波ワイド文庫・2001年)

◎水谷武司著『東京は世界最悪の災害危険都市』(東信堂・2018年)

◎向山洋一・前田康裕著『まんがで知る授業の法則』(学芸みらい社・2016年)

◎糸井重里・古賀史健著『古賀史健がまとめた糸井重里のこと。』(ほぼ日文庫・2018年6月6日最新刊)

◇今月、読んだ本

◎西鋭夫著『國破れてマッカーサー』（中公文庫・2005年）（私物）

本書の内容については賛否両論あるだろう。ただ、次に紹介する「おわりに」には支離滅裂な現政権を支持するタイプの人々を酔わせる何物かが含まれていると感じた。そこから学ぶべきは学び、拒否すべきは断固拒否をして子孫の命運を繋いでいくことが、いま、我々一人一人に求められているという切実な危機感を持った。

繰り返すが、私は下記の文章に共感することを恐れている。克服しなければならないが、論理的に克服することが現段階ではできない。もっともっと歴史の勉強をする必要がある。

＊

○おわりに

凶暴かつ激動の二十世紀を疾風のごとく駆け抜けた日本帝国は、魂の情念が燃え上がったかのように、息が止まるほど美しく悲劇的であった。

その日本帝国の盛衰を「諸行無常の響きあり」と受け止めるだけの悟りも、精神的な鷹揚さも、成熟さも、私は持っていない。

戦後日本を作った「アメリカ日本占領」の枷（かせ）から自由になれない日本で生活している私の心は、「無」になれない。

1945年の真夏、五十万人の敵軍が焦土日本に上陸した。力尽きた日本人は、雄々しい敵兵を見て、痛烈な自信喪失に陥った。日本帝国の聖地が、夢の跡が、次々と敵兵の軍靴に踏み荒らされたが、我々日本人には抵抗する力も意思も残っていなかった。

夢を追い、ロマンの炎に身を焦がし、追えば追うほど遠くへ行ってしまう夢。それでも、その夢を見失うことなく追い求めた、貧しかったが勇敢であったあの国民は、もはや死に絶えてしまったのだろうか。戦後の日本国民は、夢を失った民なのだろうか。

日本人は勇敢だった。蛮勇かもしれない時もあったが、絶えず信念を持っていた。信じられるものを持っていた。それが日本国民の、世界的に有名な、強靱な精神力の源となっていた。食糧も弾薬も尽き、手向かえば死ぬと解っていながらも闘った日本兵。降参もせず、次から次へと玉砕する日本人。

「天皇制・軍国主義の犠牲」だけでは、説明のつかない民族の誇りのため、民族の存続のため、父母のため、夫や妻や子供のため、恋人のため、というイデオロギーを越えた一個人の「命の生きざま」も、これらの「死」に秘められているのではなからうか。

帝国主義という欧米の組織化された強者生存の、「力は正義なり」という、生死を賭けた戦いに出遅れたアジアの国日本が、「富国強兵」に国運を託し、全アジアを植民地

にしていた欧米の暴力に屈せず、「国造り」に励んでいたが、ついに 1941（昭和 16）年、国家安全のためと信じ、大戦争に突入した。

その壮絶な戦いで、国のために死んでいった日本人を単なる「犠牲者」として片付けるのは無礼である。非礼である。

戦死者たちを「犠牲者」として憐れむのは、戦後日本でアメリカの「平和洗脳教育」を受けた者たち、またアメリカの片棒を担いで「日本の平和のために」と言っている偽善者たちが持っている優越感以外のなにものでもない。

憐れむ前に、戦死していった人たちに、鎮魂の念と感謝の思いを持て。

日本という「国」が悪で、日本国民は「無実の、いや無知な犠牲者」だという発想は、マッカーサーが仕組んだものだ。東京裁判も、この発想で進行した。

この発想は、「国民が国」という民主主義の土台を引っ繰り返したものであり、マッカーサーが日本の国民に特訓した民主主義に反するものであった。

しかし、「国」が悪いとする考えは、日本国民が「国」を愛さないようにするためには、実に巧妙で、効果的な策略であった。これが、マッカーサーの「日本洗脳」だ。

この絡繰りにハマられ、ハマられた状態を戦後民主主義と崇め、国歌、国旗を「国の悪の象徴」として否定し、憲法第九条を「平和の証」と奉っている多数の有識者といわれている人たちは、「日本潰し」を企て、実行したアメリカの手先か。

悪いことは重なるもので、戦後日本でマルクス・共産主義という「神」を崇めている教師たちは、ソ連と中国の工作員であるかのように振る舞い、「日本という国が悪い」と若い世代に教え込み、戦死者を「犠牲者」と呼ぶ。

アジア・太平洋の征服を目論み、進出してきたアメリカと日本帝国が戦争した四年間を、日本の歴史の全貌と取り違え、日本の永い歴史と文化さえも全部否定するという馬鹿げたアメリカのプロパガンダを鵜呑みにした日本の有識者たちや学校教師たちは、無知なのか。

それとも、日本を裏切り、潰そうと企んでいる悪い奴の集団なのか。

征服者マッカーサーは、勇猛な日本国民を弱くしなければ、アメリカの国家安全を脅かされる、と恐怖の念に駆られていた。弱民化する最良の武器は「教育」である。

「国家百年の大計」といわれる教育を武器に使った。

アメリカが大嫌いな日教組は、アメリカの日本弱民化作戦の片棒を担がされていることに気づいていないのか。マッカーサーの日本統治能力を明白に証明したのは、彼がこの教育を重視し、徹底的に利用したことだ。

「夢を持つな」「ロマンを追うな」とマッカーサーに命令された日本は、夢を捨てた。

誇りも捨てた。信念も捨てた。捨てさせられた。

マッカーサーは攻撃を続け、日本の文化や伝統の本質は劣悪で、邪悪である故、日本国民が欧米化（キリスト教へ改宗）することに救いがあると断言した。

日本人であることは「恥」であり、それが「一億総懺悔」となる。

近年、日本中で流行している「日本社会の国際化」とか「グローバル・スタンダード化」も、占領時代に始まった「欧米化」の流れが、今や荒れ狂う洪水となって、我々に襲いかかってきているのだろう。

我々の思考を欧米化し、国語も英語化し、我々は国を挙げて、欧米の真似をすることに懸命に努力する。誇りを持てる美しい姿ではない。

明治維新以来、我々日本人は、攻撃的な欧米につき、結局何も学ばなかったのか。

歴史を無視すると、歴史の仕返しを受ける。「歴史は繰り返す」というが、それは「歴史から学ぼうとしなかった」者たちが繰り返す同じ過ちのことをいう。

「忠誠」「愛国」「恩」「義務」「責任」「道徳」「躰」という日本国民の「絆」となるべきものさえも、それらは凶暴な「軍国国家主義」を美化するものと疑われ、ズタズタにされ、日本国は内側から破壊されていった。

日本人は、「国」という考えを持ってはならない、日本人は誇れるモノを持っていないので、誇りも持ってはならない、「国」とか「誇り」という考えそのものが、戦争を始める悪性のウィルス菌であると教育された。

この恐るべき、かつ巧妙な洗脳には「平和教育」という、誰も反対できないような美しい名札が付けられていた。

現在でも、「平和教育」という漢字が独善面をして日本中の学校で横行している。

この独善が、憲法第九条となり、日本のアメリカ依存を永久化しつつある。

第九条は、日本国民の「愛国心」「国を護る義務・責任」を殺すために作られた罠だ。

第九条は、生き埋めにされた「愛国心」の墓。日本の男たちが、自分たちの妻、子供、父母、兄弟、姉妹、恋人を護らなくてもよい、いや護ることが戦争であると定めたのが、第九条。

あえて卑近な言い方をする。雄が雌を護らなくなった種族は死に絶える。他の種族のオスに守ってもらっていると、その種族に乗っ取られる。

日本の存続にとって危険極まりない第九条の枷は、アメリカにとって、「太平洋はアメリカの池」「日本はアメリカのモノ」という事実を確立した偉大な業績の証である。

「自衛」を放棄する国が、この世の中に存在するとは……。

占領後、日本の最高裁判所が「自衛隊は違憲ではない」と仄めかしているが、そのような軽薄なこじつけ論理で日本国を司ろうとしている日本政府と司法界が、日本をいじけた弱者にしている。

第九条を生んだ「精神」は、自己防衛のための武力も禁止したのだ。

無抵抗（第九条）が最も有効な防衛手段であると唱えた勝者マッカーサーの譎言（うわごと）を盲目的に信じ込んだ吉田首相と日本国民は、平和を心より望んでいたのだろうが、あまりにも無邪気であった。その場凌ぎの目先勘定だけで逃げ切ろうとしてのだろう。その「逃げ」のツケを、既に半世紀以上も日本国民は支払わされている。

第九条の下、平和教育を受けた日本の政治家たちの指導者としての評価は、彼等がいかにアメリカの国益に日本の政治・経済を擦り合わせることができるかどうかで決められている。アメリカを怒らせず、日本国民にはアメリカの国益どおりに動いていないと見せかけながら、アメリカに隷属を続ける才能が、戦後日本でリーダーシップとして高く評価されている。

近年、「アメリカは日本の内政に干渉している」と強気の発言が、マスコミにチラホラ登場してきているが、アメリカの「日本統治」は、そのような生易しい「内政干渉」どころではない。

「内政干渉」などしなくても、日本の首相は世界の征夷大將軍・アメリカ大統領がお住まいのワシントンへ参勤交代する。

日本がアメリカにいかに忠誠を尽くしても、アメリカ経済の体調がおかしくなると、アメリカの機嫌が悪くなり、日本が殴られ、日本の経済はアメリカの食べ物にされる。アメリカの経済を支えるため、アメリカ国民に良い生活をしていただくために、日本国民は膨大な貯金をし、そのカネでアメリカの、これまた膨大な国債を買う。買わされる、それでも、また殴られる。

日本が怒り狂い、ついに伝家の宝刀を抜いて、アメリカに威しをかけるかと期待しても、悲しいかな、日本の「伝家の宝刀」とは何だろうと見当もつかない現状が、にほんの姿である。

このような日本を見て、アメリカは「日本には強いリーダーがない」と言う。

私は、悪い夢を見ているのか。

日本の「伝家の宝刀」とは、日本人の「誇り」と「勇気」だ。今、憲法第九条の下に埋葬されているあの誇りだ。一個人にとっても、国家にとっても、誇りほど強力な武器はない。

敗戦後、日本人は、必死に「富」を追及し、巨万の富を築き上げることに成功し、世

界一、二位の金持ちになり、世界中からチヤホヤされて、有頂天になった。その直後、「金」の脆さを思い知らされた。

日本の輝かしい「富国」に対して、嫉みの熱病に魘されていたアジアの隣国、いや世界中の国々は、この時とばかりと追い打ちをかけ、経済超大国を土下座させ、大昔の「罪状」を取り出して謝罪させ、金を巻き上げ、捨て台詞に、「日本は正しい歴史観を持っていない」と言う。

日本人の弱い精神状態の根源は、心の中に、強い信念、信じ切れるモノ、を持たないからだ。いかに精神的な虐待を受けても、怒り狂うような、はしたないことはせず、ただ右往左往して、誰かに好かれようとする日本。

その日本が「金」を祀った宗教に、心身ともに捧げた。挙げ句の果てが、この虚しさ、この虚脱感。日本人の心の中に、今、何があるのだろうか。

誇りを捨てた民族は、必ず滅びる。

誇りを取り戻した民族は、偉大な民となり、その文化も栄える。

1945年の夏以降、日本人は自国の永い歴史を忘れ去りさえすれば、「世界中お友達」の理想郷（ユートピア）が出現するとでも思っていたのだろう。

どの国の歴史も、戦争と平和の歴史だ。善し悪しを越えた、生きるための死闘の歴史だ。イギリスの歴史も、アメリカの歴史も、中国の歴史も、生きてゆくための戦争と平和の歴史だ。この事実を知らない日本ではない。

戦後の日本国民は、第九条に甘えた。この甘えを助長したのは、アメリカ。

日本がアメリカに甘えれば甘えるほど、アメリカに都合よく操られた。この単純な上下関係が、今も続いている。日米安全保障条約である。

マッカーサーは、「民主主義」「平和」という言葉を頻繁に使ったが、「平和」の裏に、マッカーサーの恐怖心、日本民族に対する戦慄感があることを見逃してはならない。彼は、日本人に平和を望んでいたのではなく、日本人の弱民化を実行していたのだ。アメリカの国家安全のために、日本人の誇りを潰した。

アメリカに飼い慣らされた日本人は、「誇りの骸（むくろ）」を「平和」と呼ぶ。アメリカの対日「国家百年の計」は、既に完成しているのではないか。

闘う意思がないのは、平和主義ではない。敗北主義という。

平和は闘いとるものだ。闘い取るから、平和の大切さが解る。平和のための血を流し、命を落とすから、平和の尊さがわかる。

戦後日本の「平和」は、強いアメリカ軍が勝ち取った平和のお零れを投げ与えてもらっているものだ。用心棒アメリカを、多額の金を出して雇って得た「平和」。

アメリカが「神・仏」で、その力に依存する、真の他力本願の平和だ。だが、これは「平和」ではない単なる「隷属」である。アメリカへの服従なのだ。

戦いに一度負けたら、国を護ることを放棄する、しなければならない、という十二歳の少年のような発想はどこから浮上してきたのか。マッカーサーの白日夢からだ。それを、英知として「平和憲法」の中へ書き込んだ。

無防備が最強の武器だと夢見たマッカーサーは、やがてそのお伽話のような夢から目を醒ましたが、未だに醒めていないのは日本国民。

浦島太郎でもあるまいに、目が醒めたとき、日本国民が直面する現実、強者生存だけの自然淘汰の世界である。

日本国民は己の歩む道も見出せないまま、己の夢もロマンもなく、世界を牛耳るアメリカの国益の餌食となり、利用され、感謝も尊敬もされず、アメリカの極東の砦として、終焉を迎えるのだろうか。

我々の魂と誇りの情炎が、二度と燃え上がることもなく、国の宝であるべき若者たちは、国の歩みも知らず、激情の喜びや有終の美も知らず、感動する夢やロマンを見出せず、我々富国日本の住民は、二千年の国史をむざむざと犠牲にして、打ち拉がれた精神状態のまま、寂しく亡国の憂き目を見なければならないのか。

「國破れて、山河あり」は、誇り高き敗者が、戦乱で壊された夢の跡に立ち、歌った希望の詩だ。歴史に夢を活かすため、夢に歴史を持たせるため、我々が自分の手で、「占領の呪縛」の鎖を断ち切らねば、脈々と絶えることなき文化、世界に輝く文化を育ててきた美しい日本の山河が泣く。(554 ペ)

*

次に紹介する「後書」は一見すると見事なもので、なかなかこのレベルの文章を書くことは容易ではないと思われた。普通の本であればこれは「後書」ではなく、「謝辞」とでも呼ぶべきものだろう。人を酔わせる何かが含まれており、やっかいだ。

*

○後書

三十年近くアメリカに滞在して、帰国した直後、麗澤大学（千葉県柏市）の廣池幹堂（ひろいけもとたか）学長（現理事長）に出会った。日本を憂う彼の情熱に感銘を受けた。同志に巡り会った。『國破れてマッカーサー』を書くにあたり、廣池先生の力強い励ましがあつた。多額の研究助成金も頂いた。

友永由美子さん（麗澤大学図書館）は、私の質問に次々と答を出して下さった。笑顔で。友永さんは麗澤の宝。図書館の鏡。

諸坂成利助教授（日本大学法学部）はルネッサンス的な天才肌の男だ。彼の専門は比較文学で、若いのに、研究論文は数百本もあり、フランス語、スペイン語、そして英語も完璧。抜群の語学力を持っている。作曲をし、荘厳な指揮者にもなる。彼はこの原稿を丁寧に読み、清々しい批評をしてくれた。彼が私の親友であることは、私の誇りである。

労働経済学が専門の下田建人教授（麗澤大学）は私の友人で、フーバー研究所に二カ年間客員教授として滞在し、ノーベル賞を授与された経済学者たちと討論をしていた。私はスタンフォード大学で、毎日昼食を一緒にした。下田先生は卓越した洞察力を持ち合わせている。彼の洞察にはスピード感がある。彼のアドバイスには従うことにしている。

背が高く洗練された美女の熊野留理子さんは、ハワイ大学大学院から「四年間全額支給奨学金」を授与されている。彼女の成績は「全優」。博士論文（比較教育学）を執筆中にもかかわらず、この原稿を読んでくれた。私の生徒であった熊野が原稿にあれこれ注文をつける。真の恩返しである。

中央公論新社の平林孝君が編集して読みやすい本にしてくれた『國破れてマッカーサー』は、1998年に単行本として出版され増刷を重ねた。2002年、彼と日米の文化力の戦いについて書き下ろしを出版しようと話し合っていた頃、彼が癌に冒されていると診断された。病魔と闘いながら彼は原稿を読んでくれて、もっと早く書きなさい、と激励さえしてくれた。その本『日米魂力戦』（2003年）が出版される前に、日本は日本を愛した文化人を一人失った。

中公文庫の伊藤彰彦氏は『國破れてマッカーサー』の歴史的な重要性を強調された。説教されたのだ。私は原稿を何度も読み返して、中公文庫の輝かしい「文化への貢献」に恥じない本にしようと努力した。伊藤氏に深く感謝をしている。

ハッと感動させてくれる能力を持った人に出会うときがある。私が「持って生まれたかった」と羨望を超えた「憧れ」を感じる時だ。中公文庫の藤平歩（ふじひらあゆむ）氏の能力は、その憧れである。彼は何も見逃さない。すごい才能だ。この本に彼の手が入り、より一層読みやすい専門書となった。

数学好きの七歳年上の兄がハワイで亡くなった。彼が旧制中学生の時、日本帝国が負けた。アルバイトで学費を捻出していた兄は水産学を専攻し、卒業航海で七つの海を渡り、ハワイへ寄港した。ハワイ生まれの女（ひと）と結婚し、彼はハワイ島の静かな町に移住した。兄が私の留学に資金を出してくれた。夏休み、冬休みにハワイに来いと旅費を送ってくれた。その兄とやっと話ができるようになった時、「癌だ」と連絡がき

た。何度も見舞いに行った。やせ細った兄の顔に、若いときの、あの惚れ惚れとする男前の面影を見た。

哲学を愛し武道を敬い律儀であった父と、おおらかで和歌俳句を愛し父に惚れていた母は、敗戦直後の悲惨な時代の貧しい家計にもかかわらず、私たち兄弟姉妹をのびのびと自由に、知性と品性のある生き方が大切だと育ててくれた。誇りと真の強さを内に秘めた両親であった。

妻マリア、娘麗蘭（れいらん）、息子武尊（たける）は、生命の歓びと無限の愛を教えてくれた。

近代日本の国造りに献身的な働きをし、死をも恐れなかった勇敢な人々へ、戦争の破壊と敗戦の屈辱から這い上がり、飢えと絶望で茫然としていた国を世界の富国へと築き上げた人々へ、そして日本の輝かしい伝統文化と心のよりどころとなる気品を大切に生きてきた人々へ、私は感謝と追悼の想いをもちつつ、この本を捧げる。

西 鋭夫（にしとしお）

昭和十六年十二月十三日生

*

この本は深く読むべき本ではなく、今の私にとっては読んで克服すべき本であると感じた。

◎佐藤剛著『美輪明宏とヨイトマケの唄』（文藝春秋・2017年）

◎左巻健男他著『理科の実験安全マニュアル』（東京書籍・2003年）

わたしの手元にあるのは2003年刊の初版。その後、増刷された気配はない。2018年現在、Amazonで安価で入手できる。実験をはじめとする教育活動で事故を起こさないために、理想的にはすべての教師が手元に備えておくべき本だと思う。ただし、通読はできなかった。辞書的に使うべき本である。

○1章 教室内での実験

○2章 野外での活動

○3章 事故の種類と教師の過失

以上の三部構成。「これから行う活動で予測される危険はどんなことだろうか」という視点で読みこなせば、必要な情報が目に飛び込んでくるし、さらにそこから想像力を広げていくことができる手がかりとなる。まことに得がたい本である。

教師だけでなく、公民館活動等の社会教育に携わる人、さらに児童生徒自身が読んで

も得るところは大きい。この本を読むと「無茶は危険」ということが痛いほどよく分かる。不勉強が恥ずかしくなるのである。

◎島原健三郎監修『化学演示実験—高校課程を中心に』（三共出版・1982年）（屋代高校文化祭鳩祭古本市で購入）

高校教科書レベルの演示実験の方法についての手際よい解説書。その後、進歩している実験もあるだろうが、オーソドックスな実験をする前に目を通し、いまこの演示実験をやってみせる歴史的意義について考え直す素材として活用できる。「しっかり勉強して授業に臨むべし」と語りかけてくれるかのような、大きな「拾いもの」である。

◎島地勝彦著『神々にえこひいきされた男たち』（講談社+ α文庫・2017年）（私物）

素晴らしい本である。「まえがき」からして素晴らしい。「そんなに素晴らしいのなら、どれか一編を紹介せよ」という声を予測して、厳選して次に引用する。滋味深き、愛おしき一編である。しかも、突出してこの一編が素晴らしいのではない。全編が一貫してほぼこの調子なのだから、素晴らしいのである。

＊

○人生における最大にして最高の砥石（50ペ）

きっといまの若者は命がけで怒られたことはないだろう。わたしの父親は明治生まれの人で存在そのものが恐怖だった。何かというとすぐに息子を殴ったものだ。それでもシマジ少年は悪さとイタズラを繰り返したのだが。

いちばん怒られたのは、忘れもしない、オヤジのヘソクリだったのか、それとも近所の無尽の金だったのかは定かではないが、箱に入っていた金をちょいちょいくすねては、近所の友達を連れて駄菓子屋で豪遊していたのがバレたときだった。じっさい当時のわたしには、親の金は子供の金ぐらいの意識しかなかったのだ。

そのときのオヤジは珍しくまったく手を出さず、ドスのきいた声で一言だけ言った。「カツヒコ、今度お前が一元でも人の金を盗んだら、おれはお前を殺して自分も死ぬ」さすがのシマジ少年もこの言葉にはこたえた。その後わたしは72歳になる今日まで、一元たりとも他人の金をくすねたことはない。

成人してからわたしのことを真剣に怒ってくれたのは二人だけである。いま思い返してもありがたいことだと思う。

一人は東京スポーツの太刀川恒夫会長である。あるとき太刀川さんから宴の誘いがあった。同席したのはとても偉い人だった。いずれもいまは亡き松竹の奥山融社長と大和

証券の千野宜時名誉会長である。

はじめて会うVIPを前に興奮したわたしは得意のジョークを飛ばして座の雰囲気や和ませたつもりだった。奥山さんも千野さんも大いに笑ってくれたのだが、太刀川さんだけは苦虫をかみつぶしたような顔をしていた。

豪華な宴のあと気持ちよく席を立とうとすると、太刀川会長が小声で「シマジ、ちょっと付き合ってくれ」と言うではないか。普段は「シマちゃん」なのにこのときに限っては「シマジ」だった。二人のVIPは一次会でお帰りになり、わたしは太刀川さんの驥尾に付して銀座のカウンターバーに入った。

「シマジ、いい加減にしろ！」

カウンターに座るやいなや太刀川さんに怒鳴られた。

「いいか、今夜は君に、偉い人たちの話をじっくり聞いてほしくて同席してもらったんだぞ。それを何だ。君はまったく聞く耳を持たず、幫間よろしくくだらんジョークばかり言っていたではないか」

「申し訳ないことをしました。以後重々気をつけます。太刀川さん、若輩者のわたしにもう一度お二人に会う機会をいただけないでしょうか。捲土重来、挽回させて下さい」

太刀川会長は「わかった」と言って、その三ヵ月後、奥山社長と千野名誉会長に会える席をセットしてくださった。今度は一言も発することなくただただ聞き役に徹した。すると奥山会長がこう言われた。

「シマジさん、今夜は体の具合が悪いのですか。この間のジョークはどうされましたか」

それでもわたしは寡黙を保った。たしかに二人のVIPは素敵なことをおっしゃった。太刀川さんのアドバイスはこういうことだったのかとつくづく感心したものだ。

もう一度烈火のごとく怒られたのはわたしが57歳のときだ。当時の集英社社長の若菜正さんからである。忘れもしない、それは1998年9月1日、集英社の平取から集英社インターナショナルの代表取締役役に任命されて初入社の日であった。

午前中に家を出たわたしは無意識のうちに明治神宮を参拝していた。その足で伝通院の柴田鍊三郎先生のお墓に向かい、次に上野寛永寺の今東光大僧正のお墓を詣で、さらに北鎌倉の円覚寺まで足を延ばして開高健先生のお墓を参った。そしてこれからのわたしの人生を見守ってくださいと応援を頼んだのだった。

夕方近くになってようやく出社すると机の上にはメモがたくさん置かれていた。若菜社長から10回以上も電話が入っていたようだ。すぐに折り返してみたが社長はすでに会社を後にしていた。「何かあったんだろうか？」と思いながらその日は終わった。

翌朝、出社するなりいの一歩に若菜社長に電話をすると、もの凄い剣幕で怒鳴られた。「シマジ！　すぐ社長室にこい！」

おずおずと社長室に行ってみると、若菜社長は顔を真っ赤にして頭から湯気を立てていた。

「シマジ、いい加減にしろ！　初入社の日なのに、どうして会社にこなかったんだ。お前の応援しに集英社インターナショナルまで行ってやろうと思って何度も電話したんだぞ。それなのに結局お前は会社にこなかったじゃないか！」

わたしはただただ「申し訳ありませんでした」と答えるのが精一杯だった。死んだオヤジによく言われたものである。男たるものいかなる理由があろうとも弁解したり言い訳したりするのは見苦しい、と。そう言って何度も殴られた経験があったのだ。

「どうして会社にこなかったんだ！　シマジ、お前とは当分絶交する。帰っていい！」

しおれて社長室を出ながら、一週間後の有名な作家とのゴルフはどうするのだろうか、ふと思った。また、「当分」というのはどのくらいのことなんだろうとこころの端でちょっとだけ考えた。

前日になって若菜社長から電話がありゴルフは実現したのだがその日の社長は調子が悪くチョロばかり打っていた。

「おい、シマジ、どうして今日はチョロばかり出るんだろう」

「若菜さん、脇が甘いからですよ。もっと締めてください」

それを聞いて若菜さんは「ワッハハハハ」と豪快に笑った。わたしの言動をみては、いつも若菜さんがわたしに言っていたセリフだったのだ。

「シマジ、お前は脇が甘すぎる。もっと脇を締めろ！」

初入社の日真相は後日告白した。すると若菜さんはこう言った。

「そういうことは前もって教えろ。でもな、墓参りよりも社長の初出社のほうが100倍重要なんだぞ。部下たちははじめてみる新社長の立ち居振る舞いが気になって仕方がないものだ」

まったくその通りだと思う。どうしてあの日魔が差したように墓参りに出かけてしまったのだろう。自分でもよくわからない。

諸君、いまの君には命がけで怒ってくれる人が何人いるだろうか。「当分絶交する」と怒鳴ってくれる上司はいるだろうか。人生における最大にして最高の砥石は真剣に怒られることである。この歳になってしみじみ、そう思うのだ。(了)

＊

このような島地氏の言葉たちは、「宝の山」だ。

◎本多静六著『人生計画の立て方』（実業之日本社・1952年初版刊・2005年復刊）

とても読みやすい本であり、内容が滋味深い。時代が時代だから説教臭さもあるが、良いところを汲み取る読み方で自分のものにしたい内容は多い。以下の部分はその例。

○処世九則

- 第一 常に心を快活に持すること。
- 第二 専心その業に励むこと。
- 第三 功は人に譲り，責は自ら負うこと。
- 第四 善を称し悪を問わないこと。
- 第五 本業に妨げなき好機はいやしくも逸しないこと。
- 第六 常に普通収入の四分の一と臨時収入の全部を貯えること。
- 第七 人から受けた恩は必ず返すこと。
- 第八 人事を尽くして時節を待つこと。
- 第九 原則として個人間に金銭貸借を行わぬこと。（以上 90 ペ）

○山登りの教えるところ

- 一 まず自分の体力と立場，実力と境遇に応じた最も適当なコースを，自分自身でもよく研究調査し，またその道の経験家にも相談して選定することである。
- 二 一度決定したコースは途中で変更しないこと。
- 三 なるべく軽装をし，不要品を持参せぬこと。
- 四 急がず，止まず，怠らぬこと。
- 五 途中を楽しみながら登ること。
- 六 食物は腹八分目に摂ること。
- 七 無駄道，寄り道をしないこと。
- 八 時と場合によっては，急がば回れの必要もある。
- 九 近道，裏道をしないこと。（以上， 115 ペ）

○老人自戒七則

- 一 名利と齢とに超越して，日に新たなる努力を楽しむ。ただし，他人の名利と齢とはこれを尊重すること。
- 二 他者，来訪者の言に傾聴して，問われざるは語らず。
- 三 自慢話，昔話，長談義はこれを慎み，同じことを繰り返さぬ。

- 四 若人の短所，欠点，失敗を叱らず，かえって同情的にその善後策を教える。
- 五 若人の意見，行動，計画を頭から貶さず，できるだけそれを生かし，助長する。
- 六 老人の創意，創作は，一度若人たちの意見に徴し，その賛成を得た上で発表する。
- 七 会議，会合にはまず若人に発言させ，老人自らはその後に発言する。しかも，なるべく若人の言を生かし，補正すべきを補正，いわゆる錦上さらに花を添える意味にしゃべること。(220 ペ)
- 「本多博士は，やるべきことをコツコツと地味にやった普通の人」…本田健氏のことば (240 ペ)

◇次回以降の予告

- ◎森田敦史著『なにもしていないのに調子がいい』(クロスメディア・パブリッシング・2016年)(私物)
- ◎板倉聖宣著『増補版・模倣と創造』(仮説社・1987年)(私物)
- ◎八代目桂文楽著『芸談あばからべっそん』(ちくま文庫・1992年)(私物)
- ◎マックス・ウェーバー著・中山元訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(日経BPクラシックス・2010年)(私物)
- ◎牧野雅彦著『新書で名著をモノにする「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」』(光文社新書・2011年)(私物)
- ◎廣松渉・加藤尚武編訳『ヘーゲル・セレクション』(平凡社ライブラリー・2017年)(私物)
- ◎文藝別冊『KAWADE 夢ムック・立川談志』(河出書房新社・2013年)(私物)
- ◎立川談志著『努力とは馬鹿に恵えた夢である』(新潮社・2014年)(私物)

◇まとめ・つぶやきなど

- フェイスブックで人名検索をしていたとき，偶然見つけた食前・食後の言葉。印象深かったのでコピペしておく。食前のことば「天地一切衆生の恩徳を思い 己の行いを省み 貪りの心を離れ 心静かによくかみて 道業を成就せんがために この食を頂きます」食後のことば「衆生馳走の賜物今すでに受く 願わくばこの力をいたずらに消す事なからん」。これとは別に，ある先輩教師から酒を飲む前に「南無薬師瑠璃光如来」と唱えると良いと教わった。
- 化学実験ジョークをひとつ。化学生徒実験における「不確定性原理」。化学実験の実力を見きわめるため，生徒の手元を教師が観察すると，生徒は緊張してぎこちない手つ

きになり、教師が観察していないときのような滑らかな手さばきで実験を進めることができなくなってしまう。したがって、教師は生徒に対して「観察している」ことを悟られてはならない。「見れども見えず」ならぬ「見ずとも見える」方法論の確立が望まれる。ハイゼンベルグには笑われるかも知れない。〔7月2日（月）9:55 鳩祭片付けの合間に〕

○今日、偶然、北信理化の古瀬さんに出会った。夏の大会に向けて実験装置の準備を進める必要があったので、きょう、打ち合わせができてよかった。鳩祭が終わったこともあり、ホッとしている。〔7月2日（月）14:44 これからホームセンターに「さかなのおうち」を見に行く〕

○仮説実験授業を実施するにあたって、次の点に留意することはとても大切であり、これは自分自身の教育活動を「メタ認知」をすること、そのものではなからうか。

・歴史的意義　・子どもたちとの関係　・保護者との関係　・職員集団の中での関係
・子どもたちの安全　・費用（費用対効果）　・教育プログラムの中における位置づけ
（学校生活〇年間、〇年生での一年間、〇学期の中で、月間の中で、週の中で、その日の授業の中で）すなわち、「思いつき」では効果は高まらない、でも思い立ったら思い切って実施することもしときには必要。この考え方のヒントになる話は、1989年8月に蒲郡・三河ハイツの「仮説実験授業セミナー」で板倉聖宣先生の講演で聞いた。迫力がある話だった。「科学とヒューマニズムと実験」というようなタイトルで『たのしい授業』にも収録されていた。

○その昔、教師が尊敬されたのは教師たちが提示した「勉強すれば出世できて豊かになれる」という仮説がよく当たったから。これからの教師は、「このように勉強すれば豊かになれる」という具体的な方法を示して、さらに、できるならば実際に見本を示せば、教える側も教わる側も互いに豊かになれる…という仮説を空想してみた。〔以上、



7月3日(火) 14:00頃、トレッドミルの上で走りながら思いついて飛び降り、急いでメモした]

○カンニングとテスト勉強との差は紙一重。生と死の差も紙一重。合否の差も紙一重。いま何をすべきか考えて実行した者勝ちのこの世界。

○京都大学の入試でかつて「ガスバーナーの点火法を60字程度で説明せよ」との問題が出題されたことがある。これからの入試のことも先読みして、屋代高校6月の定期考査で出題してみた。思いの外、生徒たちは良く書けた。出題してみてから気づいたことがある。それは現代が「点火法」の過渡期にあるということだった。マッチを使って点火するときと、チャッカマンを使って点火するときとは、その方法が大きく異なる。マッチを使うときには「ガスは出ているが火がついていない」という魔の瞬間が存在する。それはマッチに火を点けるときには両手がふさがりからである。ところが、チャッカマンは片手で点火できる。したがって、チャッカマンで点火しながら、もう一方の手でガスの栓をひねることが可能となる。この方法ならば「魔の瞬間」を避けることが可能になるのだ。現代の技術は19世紀に確立したブンゼンバーナーの点火法まで、静かに変えてしまうのである。

○台風の影響と思われる風が、研究室を通り過ぎていく。そこで一句。「涼風や羽回しては通り過ぐ」

○日本は国家主権をアウトソーシングしてしまったとんでもない超先進国だと見ることもできるのではないか。「《裸の王様》には買ってでもなれ」≡「若いときの苦労は買ってでもせよ」。

○約40年前、文化祭の事務連絡で、好きでもない女の子の家に電話(一家に一台、誰が出るかわからないドキドキ感!)をしなければならなくなった。電話をするときに思った、「何でこんなことでドキドキしなきゃいけないんだ? 本当に好きな女の子の時にドキドキしなくなってしまったら、どうしてくれるんだ!」。文化祭(鳩祭)前、この話を授業の合間にしたら生徒たちは爆笑してくれた。[以上, 7月4日(水) 13:24]

○大会準備中にすごい本を読んだ。戸部他著『失敗の本質』(ダイヤモンド社・1984年) この本は夏の大会に持って行くレポートに論理的な穴がないかを調べるためにぎつと読んだ。思わずうならされる記述に満ちた名著。詳しくはまた来月。[7月27日(金) 16:30]